

Heart of Darkness 試論

伊 藤 治 男

A Study on *Heart of Darkness*

Haruo ITO

要 旨

この小論は第1章においてこの作品の背景を歴史的、伝記的見地から分析を試み、第2章では作品のあらすじの要約をし、第3章ではこの作品に異なった光をあてて、批評を試みるものである。

Synopsis

This article intends to analyze the background of this work from the historical and biographical viewpoint in the first chapter, and in the next one, summarizes the plot of this story and in the last chapter, tries to criticize the work in various lights.

I

1889年の夏、Conrad 31オのとき、彼のロシアの市民としての義務の免除が官報に載ったのであった。彼は同年2月、Otago号の船長としと Melbourne から Adelaide に出発、途中、伯父の死期迫った手紙を受け取り、船長をやめ、ヨーロッパへ帰ったのである。前記官報による通知の直後、ロンドンに戻ったのであった。彼はロシア国籍を離脱したものの、伯父を見舞いにロシア領に入ることはまだ困難な状況であった。当時は彼は経済的にも苦しく、安定した船長の職もなかった⁽¹⁾のである。それはちょうど 'Heart of Darkness' のナレーターである Marlow の状態と重なるものであった。すなわち、

'I had then, as you remember, just returned to London after a lot of Indian Ocean, Pacific, China seas — a regular dose of the East — six years or so, and I was loafing about, hindering you fellows in your work and invading your homes, just as though I had got a heavenly mission to civilize you. It was very fine for a time,

but after a bit I did get rid of resting. Then I began to look for a ship — I should think the hardest work on earth. But the ships wouldn't even look at me. And I got tired of that game, too.'⁽²⁾

事は思うように運ばず、いらいらしていたらしいのも又事実であった。一方、1889年前後はアフリカのコンゴにとっては極めて注目を浴びていた時期であった。1875年9月、ベルギーのレオポルド2世は中央アフリカ開発国際協会を設立し、多くの利益を得ていたのと、1872年から始まった数度にわたるスタンレイの探検が世界に紹介されて以来、アフリカは世界中の強烈な興味と、経済的権益に対する欲望の渦中にまき込まれて行ったのである。そのような状況の中で、Conrad はロンドンのテムズ河の北にある Bessborough Gardens の一室で、船長の職を求めつつ、無為の日々を送っていた。しかしこの Bessborough Gardens の数ヶ月の中に、彼は作家として、もの書きをしたいと云う衝動にかられ、船に乗りたいと云う気持ちに水をさす結果となった。⁽³⁾⁽⁴⁾しかし、彼は職探しを続行、友人のつてを頼ってベルギーのコンゴ貿易振興協会の持ち船で働けそうなのを知るや、彼は叔

父 Thaddeus の遠い縁戚になるブリュセル在住の Alexander Paradowski に手紙を書き助力を求めたのである。Alexander の妻 Marguerite はレオポルド 2 世の側近筋に影響力があつたらしく、彼のコンゴ行きが実現の運びとなる。実際、*Heart of Darkness* の中で、Marlow は次のように語って、作者自身の体験がそのまゝ、作品の中で再現している。

'I always went my own road and on my own legs where I had a mind to go. I wouldnt have believed it of myself; but, then —— you see —— I felt somehow I must get there by hook or by crook. So I worried them. The men said, 'My dear fellow', and did nothing. Then —— would you believe it? —— I tried the woman. I, Charlie Marlow, set the women to work —— to get a job'⁽⁵⁾

さてかくまで何故 Conrad はコンゴ行きに執着したのか、コンゴ河を遡行する船は小さな河蒸気船と呼ばれるもので、いかに時代の脚光をあびているアフリカとはいえ、コンゴ河を遡ることは、さまざまな危険があり、文明とは全く隔絶された世界であることは確かだったのである。しかし、この作品の中で Marlow は次のように語っている。

'Now when I was a little chap I had a passion for maps. I would look for hours at South America, or Africa, or Australia, and lose myself in all the glories of exploration. At that time there were many blank spaces on the earth, and when I saw one that looked particularly inviting on a map (but they all look that) I would put my finger on it and say, 'When I grow up I will go there','⁽⁶⁾

又、Conrad 自身の回想録でもある *A Personal Record* の中でも、1868 年、彼が 9 歳の時、その当時のアフリカの地図を見て、大人になったら、そこへ行くことを決心していた⁽⁷⁾と語っていることを考え合わせると、アフリカ行きは子供の時から彼の願望であつたと考えられるのである。

1890 年 2 月ブリュセルで Alexander Paradowski と彼の妻 Marguerite に会った後、彼が故国を後にしてから 15 年ぶりにワルシャワを経由して

故郷キエフの土地を訪れるのである。重い病いにあつた叔父 Thaddeus は彼が故郷へ向かっていると云う電報を受取った時は夜も眠られなかった程喜んだと云う。⁽⁸⁾ 2 ヶ月後、ブリュセルに戻った Conrad はロンドンに帰り、1890 年 5 月、ボルドーからフランス船に乗ってアフリカのボマへ出発した。かくして彼のコンゴ旅行が始まったのである。ボマからマタディに着いたのが 1890 年の 6 月 13 日と彼の残したコンゴ日記 (*The Congo Diary*) ⁽⁹⁾ に記されている。その日記によると、マタディから徒歩で Stantey Pool 近くの Kinshasa まで進むのだが、途中、蚊、水、キャンプ地不足等に悩まされ、ひどい旅であつたことがわかる。途中、Kinshasa から前述の Marguerite Poradowska に手紙を書いているが、2 ヶ月の間に 4 度熱病にかかり苦しんだ⁽¹⁰⁾とあることから考えてみてもそのひどさが想像できる。Kinshasa では彼が乗る手筈になっていた船 (Florida 号) は大破していて使いものにならないこともわかる。それで他の蒸気船 (Roi des Berges 号) に乗ってコンゴ河を遡航することになる。Stanley Pool を 8 月 4 日に出発して 28 日後の 9 月 1 日、目的地 Stanley Falls に着いた。このスピードは当時としてはとても速いものであつたらしい。

さてこのひどい、彼にとっては長かつた 4 ヶ月程のコンゴ流域の旅で見たものは何であつたか、それは勿論、Conrad 自身が *Heart of Darkness* の 1946 年版の Authors Note の中で述べていることから考えても、彼のコンゴの実体験がそっくり *Heart of Darkness* の中に描かれていると考えられる。すなわち、

"*Heart of Darkness* is experience, too; but it is experience pushed a little (and only very little) beyond the actual facts of the case for the perfectly legitimate, I believe,".....⁽¹¹⁾

とすれば、彼のコンゴで見たものは正にこの作品の中で Marlow が見たもののなのである。この作品が、作者自身が自分の書いたコンゴ日記を見て書いたのではないかと云われた程、映像が重なっていると指摘されるのは当然であろう。実際は Conrad はこの作品を書くにあたっては日記を参考にはしていなかったと Conrad 夫人が言明し、彼の死後、日記の存在が発見された⁽¹²⁾のであつた。

II

冒頭で夕暮せまるテムズ河、河口の風景描写から始まるこの作品はその導入の「我々」4人と云う us と云う人称と「彼」なる3人称で書かれた部分と、途中で2回のナレーションの中断部分と、最後の個所のすっかり暗くなったテムズ河の描写以外はすべて「彼」Marlow の体験談の形式で書かれている。

Marlow が登場する作品は他に短編小説の *Youth* と長編の *Lord Jim* 等があるが、*Lord Jim* では Marlow の役がナレーターだけにとどまらず、主人公 Jim の運命に関りを持ち、お互いに影響し合う立場とは違って、*Heart of Darkness* に於いては、専らナレーターのための登場である。

テムズ河を包むロンドンの夕闇が濃くなった時、Marlow が突然口にした言葉はやがて語られるアフリカ紀行の序曲なのである。すなわち、

“And this also,” said Marlow suddenly, “has been one of the dark places of the earth.”⁽¹³⁾

Marlow が6年ぶりで、インド洋、太平洋、シナ海を廻って帰国したが、今度船に乗ろうと思っても、なかなか仕事がない。子供の頃地図が好きで、南アメリカやアフリカやオーストラリアを地図の上で眺め、いっかはここへ行くぞと心に決めていたアフリカの地図を、フリート街で見かけ、アフリカ行きの考えが頭から離れなくなる。そしてそのアフリカの河を行き来する貿易会社のことを思いつき、その会社がヨーロッパ大陸の会社であり、その国に住んでいる叔母を頼ることを考える。この叔母の尽力で彼はコンゴ河の蒸気船の船長の職を手にしたのだった。その会社との契約のため、ブリュセルへ赴く。その街は彼には「白い墓」を連想させるものだった。そして大きなビルの立ち並ぶ人通りのない通りにその会社があった。その受付の老若2人の女性は黒い毛糸で編物をしており、この会社に対する一つの暗示を示していた。契約書にサインする際にも何かうさんくささを感じ、かすかな不安をおぼえる。彼の乗るべき船は既にコンゴにあり、彼はフランス船に乗ってコンゴ河口へと進む。途中、フランスの砲艦が、アフリカのジャングルめがけて砲弾を打ち込んでおり、その砲撃は眼に見える標的がないため、彼には現実のものとは思えない。1日に3人の割で水兵が熱病で倒れて行ったり、溺死者がいても、

誰も特に注意を払わない。30日かかってコンゴ河口にある会社の the Outer Station に着く、そこで彼がジャングルの中にひっくり返っているボーラーを見た時、彼はばかばかしさを感じ、又、アフリカの原住民が飢えて、疲れ切った姿をしており、鎖につながられて、じっと立っている力もないのを見て、強い衝撃を受けるのだった。

彼はそれで計理主任に会い、その計理主任は Kurtz なる人物は非常にすぐれた人物であることを聞かされる。その時から Kurtz の人物像が Marlow の心に影響力を持ち始める。しかし Marlow はその「偉大な」人物に会えるまでに数ヶ月待たなければならない。事実、Marlow が the Central Station への二百数十マイルを徒歩で行く60人からなるキャラバンを編成するのにその Outer-Station で10日待たなければならなかった。Marlow が the Central Station へ着いたのは、出発してから15日後だったが、彼が船長として乗組むことになっていた船は大穴をあけて沈没してしまったことを知る。その船は Marlow が到着する数日前に出発し、その航海を始めて間もなく、岩との破片とで底に穴があいたのだと聞かされる。Marlow はやつのことでその沈没船をひき上げ、修理にとりかかるが、リベットがないために、修理はなかなか進まない。鉚がなくて彼は修理を進めなくなる。広大なジャングルの中でこんなちっぽけなものがないと云う矛盾のために、彼は気狂いのように踊りだす始末である。鉚が到着する迄、彼は何日間も長い間、「巡礼」たちが到着してはその支所を出発していくのを見て過ぎなければならなかった。その「巡礼」たちとは象牙商人のことで、エルドラド探検隊のメンバーだと云い、彼等は、徒歩でキャラバンを組み、獲物を求めて旅をして歩くのであった。Marlow は彼等をせせら笑いつつ次のように描写している。「彼等の信念は物質欲信仰そのもののものだ。そして彼等はあさましい海賊どものような口をきく。」⁽¹⁴⁾

Marlow も又その支所の支配人と、支配人の叔父と知り合いになる。彼等は Kurtz の噂をするが、それは辛辣な調子で語るのだった。Marlow は、さまざまな人にこのように2つの対立した感情——尊敬と憎悪とをかきたてることができるこの不可思議な男に対して好奇心さえおぼえるのだった。やがて沈船の修理が完了すると、支配人、「巡礼」たちと共に奥地の支所へ Marlow は船を進めることになる。Marlow の心にあるのはもはや Kurtz に会うことだけだった。彼が奥地の支所

に着く前に、Kurtz に忠実な現地人によって、彼の船は攻撃されるのだった。操舵手の黒人一人が矢を受けて犠牲になるが、Marlow の機転で他の乗員はその攻撃をかわすことができた。そして船は目的地に到着する。Marlow がそので最初に会った人物は「道化者」でロシア人青年であった。支配人や「巡礼」たちが武装して上陸し、Station へ向かったあと、その青年が船に乗り込んできて彼に語った内容は次のようなものだった。

彼は Kurtz を尊敬していること。最初は冒険の夢に酔ってアフリカの奥地まで来たが、Kurtz の弁舌と不思議な人柄に魅せられたこと。Kurtz はイギリス人を父としフランス人を母として、英国で教育を受けた人間であること。彼が最初にやって来た時は理想主義者であったこと。それがアフリカの原始の姿の大自然の中ではヨーロッパ文明の中の理想主義は消え失せてしまったこと。彼は巧みな弁舌によって原住民から恐怖と尊敬を獲得し、ジャングルの奥深く象牙を探して出かけるようになって、物欲に眼がくらんでしまったことなどを語る。そしてそのロシア人青年も又、Kurtz と同様、「文明社会」へは決して帰りはしないと公言する。と云うのは、彼は Kurtz との関係でありにも多くのことを知り過ぎてしまっており、もはやヨーロッパの世界の慣習や、そのみせかけの世界へはもどることができないと話す。やがてついに Marlow はやせこけた Kurtz が担架で運びだされてくる。Marlow は Kurtz に 2 人をやとった会社の命令で、Kurtz をヨーロッパへ連れ戻しに来たことを知らせる。その夜、すでに船に運び込まれていた Kurtz は自分の船室を抜け出し、それを知った Marlow は一人そのあとを追う。そして説得の上つれ帰るのであった。Kurtz は黒人達のたくかがり火や、呪文やドラムの儀式に魅せられたのであった。翌朝、Kurtz が収集した象牙を積み込み、Marlow の船は Kurtz を乗せて帰航の途につくが、間もなく Kurtz は最後に、"Horror ! Horror!" と云う言葉を残して絶命する。Marlow も又熱病に苦しむが、かろうじて助かり、会社の白い墓を思わせるブリュセルの街に帰る。Kurtz に托されていた書類を手渡すために Marlow はクルツの許婚者を訪問する。しかし Marlow はあの奥地の支所での経験で、すっかり人が変わってしまったのだ。何故なら Kurtz の記憶が Marlow の世界観を変えてしまっていたからなのだった。彼は Kurtz の許婚者に Kurtz の最後の言葉はときかれ、本当のことを云うことができず、彼が云ったのは「あ

なたの名前でした」と嘘をついてしまう。

III

さてこの作品の評価はいろいろに分けられる。まず注目に値するのはなんと云っても、F. R. Leavis の指摘である。つまり事実を淡々と語ることによって充分の「不可思議さ」とか「想像のできなさ」を表現できる場合になお、「不可思議な——inscrutable」とか、「想像もできない——unimaginable」等の形容詞を使うことによって逆効果となっていることと、そしてその結果この作品の迫力を弱めていると云う指摘である。⁽¹⁵⁾ たしかにこの作品は、くどく、ねちっこい表現の部分は多々ある。その一例として：

'Trees, trees, millions of trees, massive, immense, running up high ; and at their foot, hugging the bank against the stream crept the little begrimed steamboat, like a sluggish beetle crawling on the floor of a lofty portico. It made you feel very small, very lost, and yet it was not altogether depressing, that feeling. After all, if you were small, the grimy beetle crawled on - which was just what you wanted it to do. Where the pilgrims imagined it crawled to I don't know. To some place where they expected to get something, I bet! For me it crawled towards Kurtz —— exclusively ; but when the steam-pipes started leaking we crawled very slow.'⁽¹⁶⁾

これは Marlow の船が奥地の Station へ向かう途中のシーンの描写であるが、この短い文章の中に crawl と云う言葉が数回使用されている。つまりこの言葉のくり返しによって、ますます船足のはうような状況が鮮明になってくる。さらに云えば、この作品に於ける小説技法として、彼は意図的にその象徴的言葉を使うことによって作者の心境の複雑さを表現しようとしたのではなかろうか。したがって、F. R. Leavis の指摘のようにこの手法がこの作品の価値を著しく減じているとは思われないのである。それが作者の屈折した心理の表現とすれば、そこには又別の意味を見出し得るのではなかろうか。その一つの証拠は彼のコンゴ旅行の際に世話になった Marguerite Poradowska への手紙の中にある。この手紙はコンゴの Kinshasa が発信地であるが、の中で彼は心から

コンゴへやって来たこと後悔していること、アフリカの全てのものが虫が好かないこと、特に男達
は虫が好かないこと。忘れてしまいたいものはア
フリカ、黒人達、そして白人の奴隷（自分もその
一人だが）⁽¹⁷⁾と云って、ひどい自己嫌悪に陥って
いる。つまりこの旅行は Conrad 自身にひどい衝
撃を与えたことは否定し得ないのである。又、彼
のコンゴ日記の最初の部分にも次の様な記述が見
られる。

'Feel considerably in doubt about the future.
Think just now that my life amongst the people
(white) around here cannot be very comfortable.
Intend avoid acquaintances as much as possi-
ble.'⁽¹⁸⁾

この記述が何を意味しているかと云えば、現地
の白人の姿を見て、自分を含めた白人全員を嫌悪
し始めたと考えられる。それは、ヨーロッパの社
会から遠く距たったアフリカの奥地で Conrad が
見たものは白人の黒人に対する虐待と搾取だった
のであり、彼自身、その体制側の一員になってい
たことによる自己嫌悪と相まって、強烈な衝撃を
受けたものと考えられる。これは西ヨーロッパ的
社会秩序に対する絶望感へと発展したとしても不
思議ではない。このことが彼の精神構造にどんな
意味を持っていたかは、彼の幼時期の環境を抜き
にしては論じられないのである。これからしばら
くはそちらへ眼を向けよう。

彼は動乱の続く 1850 年代、ポーランドと帝政ロ
シアの国境に近い、Berdyzew にて 1857 年 12 月
生まれた。父親はポーランド独立運動の志士で、
1861 年 10 月、Conrad 4 才の時、官憲に逮捕され、
1862 年北部ロシアの流刑地 Vologda へ流刑と決
定、妻子の同行が認められ、彼も同行する。1866
年 5 月、母は病気で死亡、Conrad 9 才の時である。
流刑地の気候がその原因だった。翌 1867 年秋、父
は条件つきで仮釈放されるが、父も病弱の身体と
なる。1869 年 2 月父死亡、Conrad 12 才の年令だっ
た。彼が若くして祖国を出て、船乗りになると云
う行動に走ったのは、やはりこの幼い時の苦しみ
を考えると当然と考えられよう。そして、子供の
時から文学に親しみ「ドン・キホーテ」やヴィク
トル・ユーゴー、英文学ではディケンズ、スコッ
ト等の作品を読んでいたと云うことが、彼の自伝
とも云うべき *A Personal Record*⁽¹⁹⁾ に書かれて
いるのを見ても、西ヨーロッパの自由で平和な世

界に対する憧れがあったとしても当然であら
う。又、彼の中期の作品で、ロシアの圧制下にお
ける社会を扱った政治小説、*Under Western
Eyes* の中でも、ポーランド、ロシアの社会体制下
では、「自由への欲求」「正義感」と云うものが押
しつぶされてしまう⁽²⁰⁾ことが書かれているのも、
彼の意見の一つの表明であろう。つまり彼の民族
的、家族的な不幸な経験が感じやすい Conrad 少
年の心に、自分の周囲の社会体制、ひいては祖国
そのものに対する絶望を抱いたとしても当然で
あったろうと思われる。そして Conrad 29 才の年、
1886 年、待望の英国帰化が許可され、同年船長資
格も取得、自由社会の一員として、海の生活が送
れるようになり、少年の頃の夢であったコンゴ行
きの直前にはロシア国籍の離脱と、彼の長年に亘
る夢がすべて現実のものとなつてのコンゴ行き
だったのであった。そしてコンゴで彼が見たもの
は、彼の長い間の夢であり憧れであった西ヨー
ロッパの社会が、アフリカに於ける搾取と暴政に
よって成立していたことを彼自身の眼で見、体験
し、それがロシアの圧制と同じものであると悟っ
たときの衝撃と自己嫌悪は察してあまりあるもの
である。又 4 ヶ月のコンゴ旅行は彼の肉体にも大
きな打撃を与え、その後、彼が死ぬ迄マラリヤの
再発と痛風に悩まされるのである。彼は帰国し
てから半年間程は入院、退院を繰り返し、1891 年
の 5 月には、ジュネーブまで治療に出かけている。
その頃の身近かな人にあてた手紙でも身体的苦痛
ばかりでなく精神的に参っていることがうかがえ
る⁽²¹⁾。Conrad の伝記研究家 Jocelyn Baines の言
葉を借りると、次のようになる。

'— moreover his Congo experience devas-
tatingly exposed the cleavage between human
pretensions and practice, a consciousness of
which underlies Conrad's philosophy of life.'⁽²²⁾

又 Conrad がかつて Edward Garnett に語った
言葉、'Before the Congo, I was just a mere ani-
mal.' の中にも、コンゴでの経験の彼の精神に与え
た影響を見ることができる。このように見てく
ると、彼の人生観に深い影を落したコンゴでの経験
は船乗り Conrad から作家 Conrad への変身の強
力なバネとなつたばかりでなく、作家 Conrad の
以後の陰影の多い側面に大きく作用したのであ
る。

以上の事情を考慮に入れてこの作品を眺めた場

合、これは西ヨーロッパ諸国の植民地政策弾劾の書と云えなくはない、が、とすればそれはまさに自己否定につながることになる。F. R. Leavisの指摘したこの作品の弱点とされる‘inscrutable’とか‘unimaginable’と云った形容詞の多用は、まさにConradの書き表わそうとして書き表わすことのできない、自己否定のジレンマの中の苦渋に表わしていると云えよう。それはDouglass Hewittの指摘のようにこの作品の最初の部分でMarlowの云うせりふ

‘And this also has been one of the dark places of the earth.’⁽²³⁾

と云って、ロンドンも又過去にはアフリカと同じだったと述懐したのは「アフリカの奥地でMarlowが発見するものは、まさに誰もが自分自身の中に見なければならぬ暗黒面なのだ」⁽²⁴⁾と云うHewittの意見は的を射ていると云えよう。この点においてConrad一流の、ironyをMarlowのこの言葉の中に見出すのは私だけではなからう。この作品の中に出てくる象牙あさりの連中を“Pilgrims”と表現したのはConradの頭の中にはヴァーゼルやダンテの神曲のそれが下から上へ、この世から天国へ、暗黒から光明へと云う順序であったのに、Conradのこの作品ではちょうどその旅の順序が逆になっていると云う⁽²⁵⁾ Tuckerの指摘は興味深いものがある。やはりこれもConradのironyと感ずるのは筆者だけではなからう。

さてこの作品は今迄述べたように、さまざまな側面を持ちながらConradの中篇小説の中で、Leavisの指摘にも拘らず、傑作の一つに上げられているのは、その文章の象徴的な美しさであろう。冒頭のテムズ河、河口の情景描写に始まるこの作品は、Marlowの語り口の中でも客観的でありながら、極めて視覚的で描写がなされ、作品全体が一つの散文詩の様相を呈していると云っても過言ではないであろう。まず冒頭の部分で、初めてMarlowの言葉が出てくるところ、

‘The sun set ; the dusk fell on the stream, and lights began to appear along the shore. The Chapman lighthouse, a three-legged thing erect on a mud-flat, shone strongly. Light of ships moved in the fairway — a great stir of lights going up and going down. And farther west on the upper reaches the place of monstrous town

was still marked ominously on the sky, a brooding gloom in sunshine, a lurid glare under the stars.’

“And this also,” said Marlow suddenly, “has been one of the dark places on the earth.”⁽²⁶⁾

この部分でお気づきと思うが、イタリック体の部分、太陽、夕暮、燈台、河に写った船の灯、薄暗がり、陽の光、星のきらめき、暗黒の場所、等々、明と暗とを象徴する言葉が巧みに使われていることに注目しなければならない。この光と陰、明と暗の表現はまだまだ続く。Marlowがブリュセルの社会に着いて一室に案内されたところ、

‘A door opened, a white-haired secretarial head, but wearing a compassionate expression, appeared, and a skinny forefinger beckoned me into the sanctuary. Its Light was dim, and a heavy writing-desk squatted in the middle. From behind that structure came out an impression of pale plumpness in a frock-coat.’⁽²⁷⁾

ここで感じられるのは不安である。まさに暗黒の世界の入口たるにふさわしい不気味さをたたえている。次にフランス船に乗って、アフリカ西海岸を航行中の海岸の描写では、

‘The edge of a colossal jungle, so dark-green as to be almost black, fringed with white surf, ran straight, like a ruled line, far, far away along a blue sea whose glitter was blurred by a creeping mist.’⁽²⁸⁾

とあり、ジャングルの不気味さを印象づけ、暗示的であり、明と暗のimageを巧みに表現している。さらにさらし首の部分の描写の中では、

‘I returned deliberately to the first I had seen — and there it was, black, dried, sunken, with closed eyelids, — a head that seemed to sleep at the top of that pole, and with the shrunken dry lip showing a narrow white line of the teeth, was smiling, too, smiling continuously at some endless and jocose dream of that eternal slumber.’⁽²⁹⁾

blackとwhiteと云う言葉を巧みに折り混ぜ

て、どきりとさせる効果を持ちつつ、しかも読む者に不快感を与えない表現はすばらしい。

そして死に直面している Kurtz を乗せて、コンゴ河を下る場面では、

‘The *brown* current ran swiftly out of the heart of *darkness*, bearing us down towards the sea with twice the speed of our upward progress ; and Kurtz’s life was running swiftly, too, ebbing, ebbing out of his heart into the sea of inexorable time.’⁽³⁰⁾

暗黒の世界から急速に脱しつつある暗黒世界の象徴として君臨した Kurtz。そして彼の世界から象牙と共に脱したとき、彼の命が絶きるとは、なんたる irony であろう。

そしてついに Kurtz の最後がやってくる。

‘His was impenetrable *darkness*. I looked at him as you peer down at a man who is lying at the bottom of a precipice where the *sun* never shines.’⁽³¹⁾

この表現はまさに Kurtz の持つ image を如実に表わしている個所である。そして船の中で Kurtz の死が知らされる場面では、

“Mistah Kurtz — he dead.”

All the pilgrims rushed out to see. I remained, and went on with my dinner. I believe I was considered brutally callous. However, I did not eat much.

There was a *lamp* in there — *light*, don’t you know — and outside it was so beastly, beastly *dark*.⁽³²⁾

このようにして、明と暗の image を抱かせる言葉を重ね合わせて、この小説全体を一種のサスペンスドラマに仕立て上げ、明と暗の織りなす散文詩だと云わしめる魅力がこの作品にあるからこそ、Conrad の中篇小説の中の傑作と云われるのだと思う。そして Marlow のナレーションが終って、ふたたび、夕闇濃いテムズ河の情景描写にもどるのである。

‘Marlow ceased, and sat apart, indistinct and silent, in the pose of a meditating Buddha. Nobody moved for a time. “We have lost the first

of the ebb,” said the Director, suddenly. I raised my head. The offing was barred by a *black* bank of clouds, and the tranquil waterway leading to the uttermost ends of the earth flowed *sombre* under a overcast sky — seemed to lead to the heart of an immense *darkness*.’⁽³³⁾

上記部分が、この物語の最後の部分なのだが、「この水路が広大な闇の奥へと続いているように思われた。」と云うこの最後の個所はアフリカとの距離を時間的、空間的距離なのだと読者に感じさせると同時に、かつてロンドンも又、闇の奥の場だったのだと云う冒頭の Marlow の最初のせりふの場面とは時間的相違を除けば、同じ意味を帯びてくるのである。つまり明るい光のあたっているヨーロッパから暗いアフリカへの旅立ち、そして、第一の支所から、中央支所へ、そして奥地の支所へと旅をつづけた Marlow は白い墓のようなヨーロッパの街へ帰ったのだったが、語り手 Marlow の住んでいるロンドンも又、昔は「闇の奥」だったと語るとき、作者 Conrad の胸の中には恐らく自分の故国、ポーランドも又、「闇の奥」なのだと云う想いがあったのではないだろうか。

注.

作品中の全引用は *Collected Edition of the Works of Joseph Conrad* (London : J. M. Dent & Sons 1961) に収められた *Youth, Heart of Darkness, the End of the Tether* からである。以下、*Youth* と略す。

(1) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad* (New York, McGraw-Hill, 1967) p.101.

He was thirty-one years old, had very little money and no assured position : とある。

(2) *Youth*, p.50~51.

(3) *A Personal Record*, p.69~70, p.73~74.

(4) Gerard Jean-Aubry, *The Sea Dreamer*, (London : George Allue & Unwin Ltd, 1957) p.151~152.

(5) *Youth*, p.53.

(6) *Ibid.*, p.52.

(7) *A Personal Record*, p.13.

(8) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad*, p.109.

The visit must have been deeply affecting for Conrad and have given Bobrowski immense pleasure ; Conrad had been met by Bobrowski’s servant, who had told him that the old man had hardly slept since he had received the telegram announcing that Conrad was on his way. とある。

(9) Ed. Richard Curle, *Joseph Conrad’s Diary*, (London : Strangeways 1926) p.15.

- (10) John A. Gee & Paul J. Sturn, *Letters of Joseph Conrad to Marguerite Poradowska 1890 ~ 1920*, (New York : Kennikat Press, 1973) p.16~17.
- (11) *Youth*, Author's Note, p.vii
- (12) Ed. Richard Curle, *Joseph Conrad's Diary*, Introduction, p.9~10.
- (13) *Youth*, p.48.
- (14) *Youth*, p.87.
- (15) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (長岩寛, 田中純蔵共訳, 英潮社, 昭和47年) p.228~240.
- (16) *Youth*, p.95.
- (17) John A. Gee & Paul J. Sturn, op. cit. p.15. Everything is repellent to me here. Men and things, but especially men. And I am repellent to them, too. p.17. Truly, while reading your dear letters I forgot Africa, the Congo, the black savages and white slaves (of whom I am one) who inhabit it. I was happy for an hour. と云っている。
- (18) Ed. Richard Curle, op. cit., p.15.
- (19) *A Personal Record*, p.70~71.
- (20) *Under Western Eyes*, p.7.

The Origin of Mr. Razumov's record is connected with an event characteristic of modern Russia in the actual fact : the assassination of a prominent statesman — and still more character-

istic of the moral corruption of an oppressed society where the noblest aspirations of humanity, the desire of freedom, an ardent patriotism, the love of justice, the sense of pity, and even the fidelity of simple minds are prostituted to the lust of hate and fear, the inseparable companions of an uneasy despotism. とある。

- (21) John A. Gee & Paul J. Sturn, op. cit., p.25. — I view everything with such discouragement — everything darkly. My nerves are completely disordered. とある。
- (22) Jocelyn Baines, op. cit., p.119.
- (23) *Youth*, p.48.
- (24) Douglass Hewitt, *Conrad : A Reassessment* (London : Bowes & Bowes, 1975) p.26.
- (25) Martin Tucker, *Joseph Conrad*, (New York : Frederick Ungar, 1976) p.29.
- (26) *Youth* p.47~48.
- (27) *Ibid.*, p.56.
- (27) *Ibid.*, p.60.
- (29) *Ibid.*, p.130~131.
- (30) *Ibid.*, p.147.
- (31) *Ibid.*, p.149.
- (32) *Ibid.*, p.150.
- (33) *Ibid.*, p.162.

(昭和52年11月26日受理)